

全国 ESD・SDGs 自治体会議の意義と今後の展望

長野県飯田市教育委員会 事務局学校教育課 田中 清一

1. 本会議の意義について —「情報共有」「関係形成」「自己理解」の場—

2019 飯田市立上村小学校グラウンドデザイン

飯田市の【新教育ビジョン】：道徳力による 未来をひらく 心豊かな人づくり

上村小学校のめざす子ども像：郷土を愛し、社会の一員として、自立した生活ができる子ども

～学校の願い～
 ○確かな学力を身に付け、積極的に学ぶ態度を身に付け、自ら学ぶ力を身に付けて、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○感動の心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○ふるさと上村・飯田のよさを学び、郷土を愛する心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○全国大会で上村の誇りを胸に、ふるさとを愛する子どもを育てたい。

～保護者の願い～
 ○授業の「対」・「向」を育んで、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○どんな状況でもたくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○内閣府の「未来教育」を推進し、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○少人数の学びを推進し、たくましく生きていく子どもを育てたい。

【学校教育目標】
自ら学び、豊かな心をもち、たくましく生きる上村の子。

【養育目標】
ふるさとを愛する子どもを育てたい。

【育成目標】
たくましく生きていく子どもを育てたい。

【育成目標】
ふるさとを愛する子どもを育てたい。

～平成31年度の重点目標～
 柱Ⅰ 上村小独自の教育による確かな学力を身に付けた子どもの育成
 柱Ⅱ 自らのよさを認め、自信を持って自己実現できる子どもの育成
 柱Ⅲ 自分のできる範囲で、たくましく生きていく子どもを育てたい。

【教育方針】
 ○確かな学力を身に付け、積極的に学ぶ態度を身に付けて、自ら学ぶ力を身に付けて、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○感動の心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○ふるさと上村・飯田のよさを学び、郷土を愛する心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○全国大会で上村の誇りを胸に、ふるさとを愛する子どもを育てたい。

【教育方針】
 ○確かな学力を身に付け、積極的に学ぶ態度を身に付けて、自ら学ぶ力を身に付けて、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○感動の心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○ふるさと上村・飯田のよさを学び、郷土を愛する心をもち、たくましく生きていく子どもを育てたい。
 ○全国大会で上村の誇りを胸に、ふるさとを愛する子どもを育てたい。

昨年度より本会議に参加をする中で、飯田市にとって本会議は、次の2つの意義を有するものと捉えられる。

1 つは、他市町村における ESD 実践、SDGs に関する取り組みの具体を知ることができたり、そこで取り組みを進める人たちの存在を知ったり、その人たちとつながることができたりすること（「情報共有」「関係形成」）である。

「知ること」「つながること」がもたらす効果において最たるものは、自分の属する自治体の取り組みに、「知ること」によってもたらされた新たな取り組みを加えたり、「知ること」「つながること」による刺激・触発が、参加者が属する自治体の取り組みに創造や工夫をこらしたりすることだろう。例えば飯田市においては、特に教育委員会における取り組みに、その効果を見ることが出来る。本会議で「知ること」「つながること」のできた福岡県大牟田市における ESD・SDGs 実践から受けた刺激・触発が、本市遠山地区における ESD 実践における新たな展開につながっている（本会議で知遇を得た大牟田市教育委員会の方から、飯田市教育委員会に大牟田市主催の ESD・SDGs 教育委員会サミットにお招きい

計画の概要

- ◆ 計画の名称 上村基本構想・基本計画
- ◆ 計画期間 令和2年度～令和11年度(10カ年)
- ◆ キャッチフレーズ
 (案)「小さくてもキラリと光る郷(さと)・上村」
- ◆ 今、自分たちができること、残していきたいもの、そんな想いを込めた計画

ただき、そこで大牟田市はもとより他地域の取り組みを数多く知ったり、そこで新たなつながりをつくったりすることができた)。具体的には、遠山地区の上村小学校(児童数15名)の学校運営のグランドデザインがSDGsを視点に大幅に整理され、SDGsが学校の全教育活動と関連づけられることで、学校の魅力化と地域の持続可能性の豊饒化に貢献する学校づくりを、同時に具現しようとする取り組みにつながっている。さらに、学校のSDGs運営の取り組みが、学校を支えるコミュニティスクール運営協議会(かみむらっこ応援団)を介して地域自治組織(上村まちづくり委員会)に波及している。現在、上村地区では向こう10年間の「地区基本構想・基本計画」の策定作業が行われており、その「基本構想・基本計画」がSDGsを視点に議論され、組み立てられている。小学校のSDGs運営が「台風の目」となって地域づくりの方向性をも巻き込み、スクールコミュニティとしての上村地区が胎動しつつある。



もう1つの意義は、本会議における参加自治体による報告行為(報告をまとめること、他者に発信すること)が、参加者が属する自治体のESD・SDGs実践の特質(良さと課題)を自己理解する好機となっていること(「自己理解」)である。

飯田市も昨年度、本市における取り組み(遠山地区の学校、地域におけるESD・SDGs実践の成果と課題)を報告

する機会をいただいた。このことが、報告担当者の私だけでなく、同行した本市職員にとっても、特に本市における地域の持続可能性を高めるための諸施策をSDGsとの関連において捉え直したり、新たな方向性や事業展開を考えたりする好機となった。

2. 本会議の今後の展望について

本会議には、1に述べたような「情報共有」「関係形成」「自己理解」を促す機能と意義があると考えるが、そのことをふまえて、本会議の今後の展望について私見を述べる。

ESD・SDGs実践に限らず、一般論としても、行政機関が特定の目的のために、特定の方向性をもった取り組みへの主体的な関わりを地域住民に対して求めた時、その取り組み自体に妥当性や正当性が仮に認められるとしても、地域住民にとっては、それは他者から「押し付けられたもの」「やらされているもの」になってしまう。そしてその結果、思わしくない結末がもたらされたり、行政機関と地域住民との関係性不全が生じたりすることが多い。では、こういった行政機関による一方通行的な施策遂行に陥らないためには、行政機関はどのような考え方や態度をもつべきだろうか。

正直なところ、どの自治体も上記の課題に対して、明確な「処方箋」を持ち合わせていな

いのが現状である。だからこそ、本会議において、それぞれの自治体が現在進行形で抱えている ESD・SDGs 実践の広がりを「阻む外因・内因（とその構造）」についてこそ、お互いに「情報共有」を行うことが必要だろう。そして、理想や希望をもつからこそ生まれる悩みや苦しみを抱えている人たち同士が、必要感と切迫感をもって「関係形成」をすることが肝要だろう。

その際、やや逆説的ではあるが、次のような「自己理解」を共通認識して、「情報共有」や「関係形成」を行う必要があるように思う。それは、行政機関には目的意識を明確かつ強烈にもちつつ、地域住民の内発性を喚起・駆動するためにも、自覚的に抑制的な地域住民への働きかけをしていく「忍待」が必要であること、である。

「忍耐」ではなく「忍待」－地球や地域の持続可能性の豊饒化を願う主体には、それをもに行う他者への信頼がなければならない。そのためには、私たちには「耐える」のではなく、相手を信頼して「待つ」構えが求められる。しかし、これは苦しい道行である。だからこそ、そのことの苦しみと意義を常に確認しあう場として、本会議が機能していくことが期待されるのである。